

令和5年度

中川村新たな学校づくりプロジェクト

～新たな学校のコンセプト（構想）～

令和6年 3月

中川村教育委員会

中川村が目指す新たな学校の姿
美しい村・中川村を再発見し、自ら楽しみ、次世代につなげる「みんなの学校」

学校教育が目指す子どもの姿
自ら考え、判断し、行動して、人生を開拓する力を育む



目指す子どもの姿を実現するための教育

探究的に学ぶ
自分で問いを立て、自分の方法で、自分なりの答えにたどり着く、こうした学びの経験をたくさん積むことで、主体性を育んでいきます。主体性を育むことが、自己肯定感を高めることにつながると考えます。

ごちゃまぜに学ぶ
学級だけではなく、同学年、異学年、地域の皆さんや村外の学校など、様々な人々と交わり学び合う経験をたくさん積むことで、自分も他者も大事にし、違いを認め合い、共に生きていく力を育んでいきます。

中川村全体を学びの場としてグローバルに学ぶ
ふるさと中川村の人・自然・文化などの多様な魅力にたっぷり触れながら、グローバル(=地球規模の視野で考え、地域で行動する)に学ぶ経験をたくさん積むことで、よりよい社会をつくっていかうとする意識や実践力を育んでいきます。

新たな学校建設予定地(検討委員会)
・現中川中学校敷地を予定地とする
・できるだけ広く用地を確保するため、東側公営住宅敷地も用地として検討するよう委員会から村へ意見を提出

子ども達の学びのエネルギーであふれる学校

子ども達にとって楽しく居場所となる学校

目指す新たな学校の姿を実現するための仕組みとアクション

施設一体型の小中一貫教育校〈義務教育学校〉・学校運営協議会〈文科型コミュニティスクール〉等

・9年間を一体的にとらえ、“**発達段階に応じた特色ある学びを推進するカリキュラム**”を整える

・同学年、異学年、地域の皆さんなど、“**多様な学習グループ**”で学べる体制や学校施設・設備を整える

・地域が学校と連携・協働して、“**オール中川**”で子ども達の学びを支えてる体制や活動を整える

中川村教育委員会は、中川村小中学校のこれからのあり方について、「中川村保育園、小・中学校のあり方検討委員会(令和3・4年度)」の答申を受け、「**小学校2校と中学校1校を統合し、小中一貫教育校(義務教育学校)を新設する**」ことを基本方針として定めました。令和5年度は、地区懇談会やさまざまな語り合いの機会を設けて、村民の皆さんに基本方針を説明するとともに、「こんな学校がいい」について語り合いを重ねました。出された意見や要望等を拡大教育委員会で整理・検討して、新たな学校のコンセプト(構想)をまとめました(前頁)。令和6年度は、このコンセプト(構想)を基にさらに検討を進め、目指す新たな学校の姿を具体化していきます。

1 「こんな学校がいい」を村民の皆さんと語り合う

(1) 令和5年度の取り組み

- ① 下表のとおり、さまざまな語り合いの機会を設けて、村民の皆さんに基本方針を説明するとともに、「こんな学校がいい」について語り合いを重ねました。
- ② 実施した結果については、村ホームページや広報「なかがわ」で村民の皆さんにお伝えしてきました。

項目	内容
地区懇談会	・27 地区を9グループに分けて9回、全地区を対象に1回、計 10 回開催。基本方針の説明、質疑応答、語り合いを行う。(参加者延べ 165 人)
語り合いシリーズ	<ul style="list-style-type: none"> ・全4回開催。地区懇談会の後、村民の皆さんと学び合い、考え合い、発信し合って、「こんな学校がいい」を深めた。(参加者延べ 250 人) ① セミナー…………… 白川村教育委員会新谷課長補佐、中川中牛山校長、南信教育事務所南波指導主事を講師に、先進事例、新たな学びの実践、学校運営協議会(文科型コミュニティスクール)について学び合った。 ② ワークショップ①… 「こんな学校がいい」をテーマに、学校教育の課題の洗い出しと解決策についてワークショップ形式で考え合った。 ③ ワークショップ②… 1回目のワークショップからテーマを絞り、目指す学校の姿についてワークショップ形式で考え合った。 ④ シンポジウム…… なかがわ夢見る学校プロジェクト実行委員会との共催で開催。教育委員会からコンセプト(構想)の発表、長野大学教授早坂 淳氏の講演(演題:地域と学校の連携・協働は何を可能にするのか)、子ども、保護者、学校、地域の立場から参加していただきパネルディスカッションを行って、それぞれの立場から「こんな学校がいい」を発信し合った。文化センターをメイン会場に、サブ会場(奏の森、大きな玄関)も設けて実施した。その他にも YouTube 配信、CEK 放映(録画)を行って、できるだけ多くの方々がシンポジウムに関われるよう配慮した。(シンポジウム参加者 150 人)
子ども	・中川中の希望する生徒と、学校で困っていること、その解決策等について語り合いを開催した。(参加者 45 人)
保護者	・保育園(迎えの時間を利用)、小・中学校(PTA 総会時を利用)の保護者に対して、基本方針の説明や語り合いを行った。
教職員	<ul style="list-style-type: none"> ・全3回開催。3校教職員全員が参加する教育研修会で教育のあり方について考え合った。(参加者延べ 150 人) ① 基本方針について説明、② 「宿題」をテーマに主体的な学びについてワークショップ形式で考え合った、③ 現在学校が抱える課題と解決策についてワークショップ形式で考え合った。
その他	・村議会との勉強会及び教委との合同視察(白川郷学園)、役場職員の研修会、なかがわ夢見る学校プロジェクト主催の座談会 等

(2) 語り合いで出された主な意見等

① 地区懇談会から

義務教育学校になることはよい／新しい学校に向けて挑戦していきたい／新しい学校のよさを探していきたい／学べる環境が変わっていくのはうらやましく感じる／揉まれる方が強くなる／子ども達の発言を重視していけば、大人はその土台だけつくってあげればよい／学校が居心地のよい場所になるように／自分らしく生きていける居場所づくりを／自ら考え、判断することは大事／村民アンケートで維持を支持した方の意見を大事に／今からできることを一緒にやっていきたい／交流の機会をもってやっていく／人間関係をリセットできるタイミングを9年間でどうつくるか／クラス替え、担任の交代があってよい／なぜ義務教育学校なのかをわかるように／主体性のなさは大人の空気感も影響している／子どもの主体性の前に大人が変わりたい／教育や学校が変わっていくということは地域も変わっていくこと／このプロジェクトが教職員の重荷にならない

よう、ワクワクする気持ちになるように／理想的なことばかりを盛り込んでいくのではなく、中川村のよいところを絞って盛り込んでいきたい／教職員の増員を／子ども達にたくさん
さんの体験を／宿題のない学校に／高齢者との関わりを／学習面の充実を／多様性を認める学校に、不登校を減らすという表現は窮屈／学校と地域の連携を／子どもの声
を聞いて、学校でも意見を言える場を／学校から遠くなる地区、元気がなくなることはないように対策をしていく必要／村の方でもっと都市計画を／地域も学校づくりに関わ
ってほしい／もっと村民に関心をもってほしい／地域との連携を進める接着剤のような人の存在が大事／村民も出入りできる場であるとよい(例 図書館、ランチルームなど)
／残った校舎のことを一緒に考えてほしい／是非保育園の方も考えてもらいたい 等

② 語り合いシリーズから

いつでも誰でもウェルカムな学校に／地域との連携を(例 学校に対する支援をしつつ給食も食べてもらえる、学校の中に地域の方が利用できる施設を:図書館、散歩コース
等、部活動の地域化に向け地域から指導者を等)／授業の中でついていくのに困難な子どもへのサポートを(例 地域からのサポート、未来塾のように子ども達の学習を地域
でサポート)／先生方の多忙感の解消(例 地域との連携:給食の時間を地域がサポート、学校の価値観を変換し地域が学校に入れるようにする、学校と地域をつなげる組
織や人材が必要)／教員は人事異動があるため、地域が連携して継続性を担保する／学校とは、教育とは、学校の価値観を変換する／多様な子ども達が多様なまま集団に
いることの価値を大事にしたい(カラフルな社会)／多様な子ども達を多様な人材で支えていく仕組みを／中川村の温かい空気感で地域が寄り添って共に育つ／村全体の
空気をこのプロジェクトを進めることで換えていくことが重要／給食の時間を地域がサポートする連携の仕方についてのケーススタディ(例 給食の時間を地域の方がサポート
し先生方が休めるようにする、給食の食材を地元産で対応、給食を地域の方々にも開く／給食をカフェテリア形式にする)等

③ 生徒との語り合い

小中一貫することで学校が変わるきっかけになり、活動の幅を広げることができるいいチャンス／気楽、気軽に過ごせる学校／村の人、生徒がもっとたくさん交流できるように
して／もっと子どもと大人の意見交流ができるようにして／みんなで仲良く楽しく話せる学校がいい／学年分け隔てなく気軽に接することができる環境、時間がほしい／休憩
時間を増やして／部活の種類を増やして／トイレを洋式に／自由な服装に／自習スペースがほしい／図書館を広くして／自由に服装を選べるようにして／自由な形で登校
できるようにして／小学校と中学校は分けるべき 等

④ 保護者との語り合い

小中一貫教育は反対ではないがイメージがわきにくい／村に適したカリキュラムがとても大事、それがはっきりしてくるとよい／遠いとバス通になると思うが、バス通になること
による時間的に制限されるのが心配／学校がなくなると地区が疲弊するのでは／部活のあり方を考えていく必要がある／9年制になるとクラス替えができない場合の人間関
係が心配／心や愛のこと、将来自信を持って生きていける教育を／自分身事としてとらえられる発信を／楽しく気軽に参加できるようにしてくれるとありがたい／教員は多忙な
ので、どこまでが教員でどこが地域かはっきりしなと／村の人は割と控えめなので、紙やメールで送れるというシステムがあれば／全国から入学できるような取り組みもよいの
では 等

⑤ 教職員との語り合い

学校の立場から課題だと思われること

多様な子どもへの対応:対応の難しさ／働き方改革(やりがい・働きやすさ):多忙感／地域との関係・連携(お互いに win-win になる関係に) 等

2 語り合いでの意見等に基づき、新たな学校のコンセプト(構想)をまとめる

(1) 拡大教育委員会によるコンセプト(構想)の検討

- ① 語り合いで出された意見等は拡大教育委員会(8月より8回開催)で整理・検討して、新たな学校のコンセプト(構想)をまとめました。令和6年度は、このコンセプト(構想)を基に詳細検討を行って、新たな学校の姿を具体化していく予定です。
- ② 構成 15名 ・教育委員 下平 裕司 宮下 信子 桃澤 孝之 中川由美
・有 識 者 荒井栄治郎(信州大学教職支援センター准教授) 跡部 嵩幸(SCOP 研究員)
・教育関係 清水 秀朗(中川東小学校長) 松崎 善幸(中川西小学校長) 牛山 博行(中川中学校長)
・事務局 片桐 俊男(教育長) 上山 公丘(教育次長) 荒井 貴之(総務学校係長) 安富 郁勇(社会教育係長) 橋枝 英紀(指導主事)
遠山 裕夫(指導主事)

(2) 新たな学校のコンセプト(構想)

- ① 学校教育が目指す子どもの姿:あり方検討委員会の検討の中で、子ども達の主体性と自己肯定感の低さが注目されました。子ども達にとって主体的な学びを重ねることが大切であるとの意見が多く出され、「自ら考え、判断し、行動する」ことを目指す子どもの姿としてコンセプト(構想)に位置づけ、発想の起点としました。
「自ら考え、判断し、行動して、人生を開拓する力を育む」
- ② 目指す新たな学校の姿を実現するための仕組みとアクション:主体的な学びを実現する教育環境として、3校をまとめ施設一体型の学校施設にすることで、多様な学び方や多様な人との関わりを設定しやすくすること、地域の力を学校教育に生かす仕組みづくりを進めることをコンセプト(構想)に位置づけました。
「施設一体型の義務教育学校 / 学校運営委員会(文科型コミュニティスクール)等」
- ③ 目指す子どもの姿を実現するための教育:新たな学校の具体化に向け、語り合いで出された意見等は以下の3点に整理できると考え、コンセプト(構想)に位置づけました。

探究的に学ぶ

⇒ 自分で問いを立て、自分の方法で、自分なりの答えにたどり着く、こうした学びの経験をたくさん積むことで、主体性を育んでいきます。主体性を育むことが、自己肯定感を高めることにつながると考えます。

ごちゃまぜに学ぶ

⇒ 学級だけではなく、同学年、異学年、地域の皆さんや村外の学校など、様々な人々と交わり学ぶ経験をたくさん積むことで、自分も他者も大事にし、違いを認め合い、共に生きていく力を育んでいきます。

中川村全体を学びの場としてグローバルに学ぶ

⇒ ふるさと中川村の人・自然・文化などの多様な魅力にたっぷり触れながら、グローバル(=地球規模の視野で考え、地域で行動する)に学ぶ経験をたくさん積むことで、よりよい社会をつくっていかうとする意識や実践力を育んでいきます。

- ④ 中川村が目指す新たな学校の姿:学校が変わるということは、村が変わるということです。新たな学校づくりがオール中川一jの動きとなって、村民の皆さんも「美しい村・中川村」を再発見することを自ら楽しみ次世代につなげていく、そうすることで、「みんなの学校」になっていくと考えました。そんな学校を目指していきたいと考えます。

「美しい村・中川村を再発見し、自ら楽しみ、次世代につなげる「みんなの学校」

3 令和6年度の詳細検討に向けた方向性

〈新たな学校づくり〉 東洋大学名誉教授 長澤 悟氏(令和2年度 国立教育政策研究所講演会資料より)

・学校づくりとは

- ① 教育と施設、学校と地域、ソフトとハードを総合的に考えること
- ② 建築は「土地」の上に建ち、学校は「観」の上に建つ
- ③ はじめに関係者が「観」を共有する計画プロセスが大切
- ④ その答え、姿は学校ごと、地域ごとに異なる ⇒ 「私たちの学校」

- ・子供観 未来社会に生きる子供の姿を描く
- ・教育観 教育を問い直し、目標を共有する
- ・学校観 地域のみならず、地域にとっての学校を考える
- ・施設観 固定観念にとらわれずに意見を出し合う

〈新たな学校のコンセプト(構想)〉 中川村新たな学校づくりプロジェクト

・目指す新たな学校の姿を実現するための仕組みとアクション

施設一体型の小中一貫教育校(義務教育学校)

9年制(前期課程:小学校課程、後期課程:中学校課程)とし、9年間を一体的にとらえ教育課程を編成、個別最適・協働の学び

学校運営協議会(文科型コミュニティスクール)の導入等

学校と地域が力を合わせて学校の運営に取り組むことを可能とし、地域とともにある学校への転換を図る

- ・特色あるカリキュラム
- ・多様な学習グループ
- ・地域との連携・協働

・学校教育が目指す子どもの姿

自ら考え、判断し、行動して、人生を開拓する力を育む

・目指す子どもの姿を実現するための教育

探究的に学ぶ ごちゃまぜに学ぶ 中川村全体を学びの場としてグローバル(=地球規模の視野で考え、地域で行動する)に学ぶ

〈新たな学校の学習空間デザイン〉 県立学校学習空間デザイン検討委員会最終報告より

・空間デザインを構成する4つの要素

- ① 学習空間:探究的に学ぶ空間
- ② 生活空間:居心地のよく、交流等を生む空間
- ③ 執務空間:大職員室、研究や交流しやすい空間
- ④ 共創空間:地域や社会とつながり共に考えたり活動したりする空間

・その他の要素

- ① 空間を補助する要素:屋外とのつながり、家具の役割
- ② 空間の配置:多用途に使える空間、空間を有効につなげる「ハブ」の重要性
- ③ 質の高い豊かな空間:居心地がよい、音や温熱への配慮、遮断性の向上、ユニバーサルデザイン
- ④ 長期的な視点による施設整備計画:維持管理、自然エネルギーの活用、可変性の高さ、持続可能な社会、SDGs

小中一貫教育

○ 施設一体型の小中一貫教育校計画の課題と対応

(参考となる先行研修) 東洋大学名誉教授長澤 悟氏(令和2年度 国立教育政策研究所講演会資料より)

- ・児童生徒の人間関係の固定化:多様な形態での異学年交流の機会を増やす⇒**異学年交流空間の確保**
- ・施設、スペースの確保及び使用時間の調整:面積効率の高い計画⇒計画面積の削除(小中単独では持てない施設による教育活動の充実)
- ・校舎間等の移動、活動に伴う児童生徒の安全の確保:階段、設備と雲寸法の違い⇒**小学生が安全に活動できる遊び・運動スペースの確保**
- ・小学生高学年のリーダー性・主体性の育成:校舎やフロアの区分による成長段階の演出⇒**各行事の中で高学年がリーダーシップを発揮する機会の設定**

〈白川郷学園の例〉 **4-2-3制**

前期課程(小学校学習指導要領):低学年ブロック

1年	2年	3年	4年
----	----	----	----

 中学年ブロック

5年	6年
----	----

後期課程(中学校学習指導要領):高学年ブロック

7年	8年	9年
----	----	----

〈信濃小中学校の例〉 **4-5制**

前期課程(小学校学習指導要領):初等部

1年	2年	3年	4年
----	----	----	----

後期課程(中学校学習指導要領):高等部

5年	6年	7年	8年	9年
----	----	----	----	----

〈その他の例〉 **4-3-2制**

前期課程(小学校学習指導要領):

1年	2年	3年	4年
----	----	----	----

(小学校-中学校への移行):

5年	6年	7年
----	----	----

後期課程(中学校学習指導要領):

8年	9年
----	----

- ・中学校における生徒指導上の問題の小学生への影響:先行事例ではあまり事例を聞かない
- ・施設一体型の課題:登下校時間、授業時間の違いへの対応、学校規模に応じた室構成と範囲、校地面積の確保、余裕ある空間を生み出す工夫

教育カリキュラム

○ 9年間を見通して、発達段階に応じた教育課程を編成

1 探求的に学ぶ 新たな学校のコンセプト(構想)に沿った教育課程の編成と授業の展開

- ・学習指導要領の方向性、「個別最適な学び」と「協働的学び」の追究 ⇒ 探求的に学ぶ

自分で問いを立て、自分の方法で、自分なりの答えにたどり着く、こうした学びの経験が積み重ねることで、主体性を育む。

主体性を育むことが、自己肯定感を高めることにつながると考える。

(参考となる先行研究)21世紀型の学校の追求 〈東京大学名誉教授 佐藤 学 氏による〉

- ・「プログラム型」から「プロジェクト型」へ移行

現行:「プログラム型」は別の言い方では階段型、階段を一段一段のぼるカリキュラムが組織され(目標—達成—評価)で単元が組織され、達成目標、結果の評価重視

今後:「プロジェクト型」は別の言い方では登山型、登山のように学びの道筋がいくつもあり(主題－探究－表現)で単元が組織され学びの景観の意味とその価値の評価

・一斉授業から協同的学びへ転換

創造的・探求的な学びによる知識の活用能力と情報処理能力の形成や、社会の生きた文脈における問題解決能力やコミュニケーション能力の形成

・教師の役割の変化

「教える専門家」から「学ぶ専門家」へと変化／口に代わって目と耳と頭が教師の活動の中心となり、①学びの課題のデザイン、②探究と協同のコーディネート、③学びを観察し的確に判断するリフレクションが中心の役割

2 ごちゃまぜに学ぶ

・同学年、異学年、地域住民など、多様な学習グループを組んで学べるよう、教育内容・教育方法とともに検討

・多様性を尊重し個々の学びや生活のある教育環境教育体制構築のために必要な人材の十分な配置(教育上、あるいは働き方改革の推進等に向けた業務の明確化と役割分担)

・さまざまな“ごちゃまぜ”の学びの実現 (例えば)老若男女、障がいのあるなし、国籍の違い 等

・ICTを活用した教育の充実

オンラインの効果的活用(交流や合同学習 他校、他市町村、外国 等)

・特別支援教育(インクルーシブ教育システム)の充実

3 中川村全体を学びの場としてグローバルに学ぶ

・特別な教科「中川ふるさと学(仮称)」の創設

ふるさと中川村の人・自然・文化などの多様な魅力にたっぷり触れながら、グローバル(=地球規模の視野で考え、地域で行動する)に学ぶ経験をたくさん積む
よりよい社会をつくっていかうとする意識や実践力を育む

地域連携

1 学校を支え共に教育に取り組む組織として、学校運営協議を設置し文科型コミュニティスクールとする

・よさ:学校運営にかかる権限があるので、積極的に地域の意見を取り入れる体制ができる

学校運営や施設面で地域の力が必要な時の窓口になる

地域の方も子どもとふれあえる機会ができる

前年度末に次年度の構想についてコミュニティスクールを通して共有、意見交換ができる

・課題:活動を停滞させないために積極的な活用が求められる

持続可能な視点から組織づくりを進めたい(機能し続ける組織に)

先行事例 白川村:学校支援部 地域活動部 家庭サポート部

2 地域連携を無理なく進めるための整備

・既存の行事などの精選や地区の再構成、学校と地区との関係の再構築 等

3 部活動の地域移行

- ・部活動の地域移行を推進

学校施設・設備

1 目指す新たな学校の教育を実現できる新しい発想の学習空間デザイン

〈県立学校学習空間デザイン検討委員会最終報告のまとめより〉

空間デザインを構成する4つの要素

- ①**学習空間**: 探究的に学ぶ空間 ②**生活空間**: 居心地のよく、交流等を生む空間 ③**執務空間**: 大職員室、研究や交流しやすい空間 ④**共創空間**: 地域や社会とつながり共に考えたり活動したりする空間

〈軽井沢風越学園の例〉

ホームルームエリア(前期・後期ホームルーム教室)、コミュニケーションエリア(異学年が交流できるスペース)、ラボラトリーエリア(特別教室)、コミュニティエリア(地域との重なり: 図書館、カフェ、フリースペース、インフォメーションセンター、散歩道)、子ども達の居場所となるスペース 等

2 生活しやすく、グローバルに学ぶための教材になる学校施設

① 中川村の自然と調和し、グローバルな視点を有した学校施設

- ・屋外とのつながり、地域産材の活用、中川村の自然との調和、児童生徒がリラックスして生活できる居心地のよさ 等
- ・ZEB(ネット・ゼロ・エネルギー・ビル)の考え方を取り入れた施設(昼光の利用、高効率な照明・空調、再生可能エネルギーなど)、SDGs 等

② 中川村のさまざまな資源を活用するとともに、地域の皆さんとの交流や学びを進める学校施設

- ・地域との関係を深くするための施設の複合化 例 図書館、給食、村民向け講座、交流スペース 等
- ・隣接する社会教育施設の活用 等

③ユニバーサルデザインに配慮した学校施設

3 充実した ICT 環境の整備

- ・個別最適な学びや協働の学び、グローバル時代に対応した言語活動等を支える環境
- ・オンラインでどこでも繋がり、交流や一緒に学習する経験を重ねられる環境

その他

1 通学方法の検討

- ・スクールバスをはじめ、子ども達の実態に合った多様な通学方法を安全安心の観点を大切にして検討
スクールバスの学校専有、チョイソコやタクシー等を利用した個別対応、距離によらない自転車利用 等
児童生徒の健康増進や保護者の負担ならないなどに配慮した通学方法の検討

2 閉校と開校

- ・3校の閉校に向けた取り組み
備品、図書等のリスト化、引越計画、業者選定等
- ・新たな学校の開校に向けた取り組み
児童生徒会組織、地区組織、PTA 組織等

3 校外の居場所づくり

- ・児童クラブ、放課後子ども教室等との連携とそれに伴うあり方、場所等の検討
- ・支援が必要な子ども等の居場所づくりとネットワークづくり

4 教職員の働き方改革

- ・働きやすさと働きがい

5 その他、新たに義務教育学校を設置するにあたっての準備・検討事項

- ・基本計画に係わる事項全般の審議、基本計画の策定
- ・予算化、法務関係作業(学校廃止、設置条例の条例改正等) 等
- ・学校名、校歌、校章、校旗、制服、体操着、カバン、校則 等

参考となる教育理論等

■「日本型学校教育」に係わる中教審答申より

- ・「我が国の教師は、子ども達の主体的な学びや、学級やグループの中での協働的な学びを展開することによって、自立した個人の育成に尽力してきた。その一方で我が国の経済発展を支えるために、『みんなと同じことができる』『言われたことを言われたとおりにできる』上質で均質な労働者の育成が高度経済成長期までの社会の要請として学校教育に求められてきた中で、『正解(知識)の暗記』の比重が大きくなり、『自ら課題を見つけ、それを解決する力』を育成するため、他者と協働し、自ら考え抜く学びが十分なされていないのではないかという指摘もある」(p8)
- ・「学校の臨時休業中、子供たちは、学校や教師からの指示・発信がないと、『何をして良いか分からず』学びを止めてしまうという実態が見られたことから、これまでの学校教育では、自立した学習者を十分育てられていなかったのではないかという指摘もある」(p13)
- ・このような現状を踏まえ、個別最適な学びの拡充により、「日本型学校教育」をブラッシュアップすることが可能だとしている。(上智大奈須先生による)
⇒「目指すべき『令和の日本型学校教育』の姿を『全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現』とする」(p19)

■ 苫野一徳 熊本大学教育学部准教授

現代の公教育の問題の根

・実際に公教育ができたのは約 150 年前。この 100 年の間に、「自由の相互承認」の実際化という公教育の本質は見失われてしまった。結局、公教育は当時、上質で均質な兵隊や労働者を作るための、富国強兵と殖産興業の具として使われたのである。現代の公教育の問題の根は、150 年変わらない日本の教育システムにある。

⇒「自由の相互承認」の実質化へ

- ・公教育の本質: 全ての子ども達が「自由」に生きられる力を育むこと
- ・自由とは: 生きたいように生きられる(=個別最適な学び)
- ・相互承認: お互いにそういう存在であることを認め合う(=協働的な学び)
- ・根本: ①探究する ②探究の経験をたっぷり積む ③多様な人がごちゃ混ぜになって、多様性を生かし合い、認め合おうとする力を最大限発揮できるよう環境を整える
- ・土台: 学校全体が温かい場であることが大事(信頼と承認の空間)
⇒学校全体が学びのエネルギーにあふれる場所になる／学校が子ども達にとって楽しい場所になる

■ 信州学びの円卓会議

- ・一律的な指導から、児童生徒一人一人の個性や特性に応じた「個別最適な学び」への転換に向け、6つの課題を整理(座長 信州大学准教授 荒井英治郎氏)

- ① 子どもがやりたいことを実現できる学校づくり
- ② 教員がチャレンジしたいことを実現できる学校づくり
- ③ 入試制度の見直し
- ④ 学校や地域、フリースクール、行政など、さまざまな期間の連携・協働
- ⑤ 小規模校ならではの学びの実現

⑥ 学びの場を信州全体で支えるために必要な取り組み

■学校の改革 東京大学名誉教授 佐藤 学 氏

21世紀型の学校

- ① グローバル市民の形成を目的とする
- ② 平等公正な教育を掲げて学びのイノベーションを推進する
- ③ 探究と協同の学びで学習者中心の授業を推進する
- ④ 教師は教える専門家から学びの専門家へ移行する
- ⑤ 教職専門性の開発を学校経営の中心に設定する

学びの共同体の改革

- ① 子どもたちが学びの主人公・主権者となって一人残らず学びの権利を実現していること
- ② 教室にケアの共同体を実現し、一人も独りにしない学びを実現していること
- ③ 聞き合う関係による民主主義を実現し、対話と協同のコミュニケーションを実現していること
- ④ 共有の学び(教科書レベル)とジャンプの学び(教科書を超えるレベル)で学びをデザインし、質の高い学びを実現していること
- ⑤ 教師同士が教室の事実から学び合う同僚性を構築していることの特徴を有していること

学力の向上

- ・学力向上の最大の秘訣は、学力向上を目的にしないことである。学力向上は、学びの経験の向上の結果であって、目的ではない
- ・通常、教師は基礎的学力が向上して、その後に発展的学力が向上すると考えているが、事実は、その逆なのである。席に発展的学力が向上し、その後に基礎的学力が向上する
- ・学力の向上は「二段ロケット」で進行する。第一段階は低学力の子どもの学力が向上し、学校全体の平均点を引き上げる。そして次に、中位以上の子どもの学力が向上し、さらに学校全体の平均点を引き上げる

その他

- ・学びの共同体の学校改革においては、改革派「上から」も「下から」も推進することを追及している。「トップダウン」と「ボトムアップ」の二項対立を克服することが必要である。しかし、その前提として学校改革の「内と外の弁証法」、すなわち学校は内側からしか変わらない。しかし、外からの支援がなければその改革は持続しないという原則を固持する必要がある
- ・学校改革とその普及は緩やかであればゆるやかであるほど、確実に根をはると考えている。改革を成功させる最大の条件は、決して焦らないことである
- ・保護者の「ボランティア」による授業への協力は、一部の保護者に限られることから、保護者間の連帯や保護者の学校への信頼を損なう結果をももたらしていると思う。必要なことは、保護者の誰もが対等に学校づくりに参加でき、教師と保護者の信頼関係と保護者同士の連帯を形成するシステムを構築することです

■長野大学教授 早坂 淳 氏

- ・世界の教育学研究者が考えるこれからの教育のポイント 「探究」と「協働」